

堀切峠

水戸と奥州南郷（福島県南部、塙町周辺）を結ぶ南郷街道（南郷道）は、現在の国道一一八号線とほぼ同じルートをとる。江戸時代に整備された道（往還ともいう）です。同じように水戸藩領内を南北に貫く道は、他に陸前浜街道、棚倉道などがあり、それらを結ぶ東西道や河川や湖沼を結ぶ水上交通も急速に発達したのが江戸時代でした。

江戸時代、道は幕府管轄の五街道（東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中）と、管理責任を領主がもつ脇往還とに区分して整備された。一般に「南郷街道」と称されていますが、「街道」「道中」という呼び名はこの五街道についてのみ使われますので、正確には「南郷道」「南郷往還」と称されるべきでしょう（本稿では以下「南郷道」と記します）。この南郷道については水戸藩の地誌に記述が散見されます。中でも代表的なのが、水戸藩の下級役人であった加藤善兵衛（寛齋）が書いた「北郡里程間数之記」（以下「間数之記」という書物です。寛齋の記述してい

る道が必ずしもすべて南郷道とはい切れませんが、大きく外れることはないと考えられます。



▲「常陸国北郡里程間数之記」堀切峠
（『山方町誌 上巻』、原資料は国立国会図書館蔵）

ここで「南郷道中の大難所」として現れるのが、盛金地区の曾根山にある堀切峠（殿山峠とも）です。堀切峠の名の由来は、峠道の両脇が土塁状になっていてあたかも堀底道であるかのようなところに由来するのでしょう。「間数之記」には「此所保内エノ往還大難場トス、通行ノ旅人此嶺ノタメ苦惱ス、アルヒハ折々ケガアリ死ス」此辺下り通行ノ旅客落馬シテ溺死度々アリ、駒除ノ埒ヲ

以テ雖防之、年忌トカ云年回ニアタリテ怪我アリ、此洞ノ大難所ナリ」と記され、大子へ向かう際の大難所で、旅人や人馬が度々滑落して死傷する場所だったことがわかります。



▲堀切峠（南側から）

それを示すように、堀切峠の両脇の塚の上には供養塔を含むたくさん石塔が立っています。十七基の石塔のうち、馬を供養するための馬頭観音が四基あります。年代は明治三十五年（一九〇二）から昭和二十八年（一九五三）という比較的新しいものです。同じ場所には念仏塔や庚申塔、六地藏などがあり、江戸時代中期にさかのぼるものもあります。この道が、明治以降もしばらくは使われていたことを意味しています。峠を越えることと現在の太子町西金に入っていきます。ですが、現在は崩落のため通り抜けることはできません。道幅の狭い急斜面の道で、荷物を積んだ馬の通行は命がけだったに違いありません。峠の南側（市内盛金）に比べると、大変な難所である



▲堀切峠の石塔群

ことが実感できます。

堀切峠の所在する盛金地区岡平では、八月下旬の日曜日に峠の子安地藏と六地藏をまつる行事が行われています。岡平班十八戸の住民の方が集まって草刈りをしてお参りし、会食をして楽しく過ごすもので、女性だけでなく男性も参加する地区をあげてのおまつりとなっています。八月下旬に地藏をまつるといふ習俗は、近畿地方を中心に分布する地藏盆の流れを汲むものと考えられます。昨年三月の震災で影響を受けましたが、地元の方々の努力により復旧されました。こうして南郷道の難所、堀切峠の景観が守られているのです。※現在は堀切峠を越えて太子町側に通り抜けることはできません。見学には十分ご注意ください。※高村喜典さんに聞き取り調査にご協力をいただきました。

歴史民俗資料館大宮館
52-11450